

外国人留学生の支援に関する臨床心理学的研究

－ 留学生を支援するチューターの感情に視点をあてて －

櫛 山 瑠 美

問題と目的

1. 日本における外国人留学生について

近年、日本への外国人留学生（以下、留学生）が増えている。海外に渡航し、そこで学業に励むことは個人に实际的な語学力の向上や業績といった実際の成果のみならず、達成感や満足感をもたらすことが考えられる。しかし、その中でも留学生は適応困難を感じており具体経験として、異文化への適応等が挙げられている（井上、2001）。文部科学省（2009）は、留学生が安心して勉学に励むことのできる環境づくりとして、カウンセリング等、留学生や家族への生活支援の取組みを促進すること等を挙げている。しかし、そのような環境づくりがされていても、留学生は留學生活上で様々な困難を体験しており、日本の留学生受入れ体制が抱える問題点は未だに解決していない。

2. 外国人留学生の支援について

留学生への支援を身近に行っているのが、大学に設置されている留学生センター等である。様々な大学で、留学生を支援する日本人学生を「チューター」と呼んでいる。チューターが、留学生を支援する制度として採用されているのが、「チューター制度」であり、入学1年目あるいは2年目の留学生を対象に、主に学部上級生等が、個々の留学生につき勉学や大学生活上のサポートをするものである（伊藤、2007）。チューターをする前には、基本的にオリエンテーションがあり、チューターの活動内容や、留学生と関わる上での注意事項等（留学生に対する思いやりを持つこと、留学生の立場に自分を置くこと等）、マニュアルを配布し行うことが多い。留学生を支援する中で、チューターは様々な困難を感じていることが報告されている。例えば、多岐にわたるチューター業務の範囲に迷うこと（大塚、2012）、文化の違いからくると思われる行動や理解の違いに戸惑いを感じることで、チューターが自分のことで忙しくて、留学生の支援をしなければならない場面があること等が挙げられている（上田・藤本、2013）。つまり、チューターをしていく上で、感情のコントロー

ルをせざるを得ない状況が推測される。

3. 感情労働

労働の際に、自らの感情のコントロールをする「感情労働」と呼ばれるものがある。感情労働は、アメリカの社会学者であるホックシールド（1983）によって提唱された概念であり、「公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行う感情の管理である」と提唱した。感情労働の条件として、第一に『対面あるいは声による接触が不可欠であること』、第二に『他人の中に何らかの感情変化を起こさねばならないこと』、第三に『雇用者は、研修や管理体制を通じて労働者の感情活動のある程度支配すること』である。チューターとしての役割は感情労働の条件に当てはまることから、感情労働の一つであるということが出来る。

これまで感情労働者であるチューターに関しての研究や、文化の違いに視点をあてた留学生の支援に関する研究はあまりなされていない。

4. 目的

本研究では、チューターがその役割を果たしながら、どのように感情を経験していたのかについて調査すること、および留学経験や文化（留学生の出身国）の違いによりチューターの留学生への関わりに違いはあるのかどうかについて、考察することを目的とする。

方法

調査期間：2016年11～12月

場所：守秘可能な公共施設の1室

研究協力者：留学経験のあるA大学のチューター経験者3名（X, Y, Z）

手続き：「研究倫理遵守に関する誓約書」を手渡し、個人情報保護に基づき調査を行うこと等を説明し、合意を得た上で研究協力者それぞれ個別にインタビューを行った。

調査方法：現象学的アプローチによるインタビューを行った後、感情労働尺度（萩野・瀧ヶ崎・稲木、2004）による質問紙を実施した。

分析方法：現象学的研究による分析と質問紙の結果を踏まえ、考察を行った。分析結果は、大学院

生5名で合評した。

結果と考察

X, Y, Zの叙述を『イタリック体』とする。

1. 留学先と留学生の出身国が異なっていたX

Xと留学生X'はお互い英語を話すことができたことから、コミュニケーションを取る上での困難さはなかった。また、Xはチューターをしている時に、X自身の留学経験を活かした関わりをしていたことについて、チューターを終えてから『無意識』に留学経験が活かされていたのではないかと感じていた。

2. 留学前にチューター経験をし、留学後もチューターを経験したY（いずれも同じ国）

留学生Y'-1と留学生Y'-2と関わっている時は、留学した経験がなかった。Y'-1とは言葉の壁があり、『意思疎通できなかった』ことを語った。ところが、Y'-2のチューターをしていた時には、言葉の壁はなく、コミュニケーションが円滑にとれ、それはY'-2が日本語を話せたからであった。Yは、留学生と関わる上で言語が大切であることを感じていた。留学後にチューターをしたY'-3は異性であったが、異性ということでのチューターのやりづらはなく、Yは留学後であったこともあり、言葉の壁もなく、やりやすかったと感じていた。

3. 留学後にチューターを経験したZ（同じ国）

Zは、留学中に留学生Z'とはルームメイトであり、友達だったことを語った。ZはZ'に、留学していた時に『お世話になった』という気持ちがあり、また友達である『Z'の為』に『至れり尽くせり』だったことを語った。

4. X, Y, Zの叙述から得られた構造

3名の叙述から、【チューターの依頼—断れなさもある中でのポジティブな承諾—】、【チューターをする前のポジティブな感情とネガティブな感情】、【チューター初期に感じる感情—忙しさと責任、留学経験による共感—】、【チューターをしている中で感じる感情—仕事としての関わり、友達としての関わり、留学経験を基にした関わり—】、【チューター終えて感じる感情—留学経験について、チューターについて—】の5つの構造に到達した。特に留学生に対して留学経験が活かされ、共感的に留学生の気持ちを考えていたこと、チューターという役割について『責任』(X, Z)を持っていたこと等が明らかになった。また、

研究協力者それぞれの留学経験や、留学生とチューターの相性の違いにより、相手に共感できるかどうかや関わりやすさの違い等が示唆された(X, Y, Z)。また本研究では、感情労働者であるチューターは、能動的にチューターを引き受けており、当初は「思いやりをもって」という注意事項を念頭に支援していたが、次第に『友達』(X, Y, Z)となっていた留学生との関わりの中でも、チューターとしての『責任』や『仕事』(X, Y, Z)があったり、『お金』(X, Y)をもらえたりと、「チューター制度」という感情規則によって感情を管理されていたことが考えられた。ところが、本研究で感情労働尺度による質問紙を行った結果は、研究協力者全体では感情労働尺度の平均値を下回った。この結果から、チューターは感情のコントロールをすることなく、心から『友達』としての留学生に関わっていたことが大きく影響しているのではないかということが示唆された。あるいは、チューター自身の感情と留学生の感情に大きな違いがなかったため、感情をコントロールする必要がなかったとも考えられる。

また本研究では、3名の研究協力者は、それぞれ異なる経緯でチューター経験をしたことが明らかになった。研究協力者3名の叙述から、留学生との相性や、コミュニケーション（言語の違い、語学力等）における問題を抱えているかどうかや留学生と関わりやすさに影響することが見出された。さらに、留学経験のあることで、より共感的になることが、留学前と後にチューターを経験した研究協力者Yの叙述からも示唆された。

臨床心理学的意義

本研究では現象学的アプローチを用いて、留学した経験のあるチューター経験者が留学生との関わりで感じる様々な感情を明らかにした。本研究で明らかになった結果は、チューターを支援する示唆となり、それが相乗効果をもって留学生の安心した生活に繋がるという意味で、今後チューターを経験する人やチューターを支援する上での一助になるのではないだろうか。

また、本研究では感情労働者であるチューターの経験した感情について考察を行った。今後は、チューターは感情労働者でもあることを考慮することが、チューター自身のバーン・アウトを防ぐことになり、より適切な留学生支援ができるのではないだろうかと考察された。